

三つ子の魂百までという言葉の意味を改めて考えます。幼い時の性格は年をとつても変わらないと一般的に解釈されています。でも逆から見れば、一生を通じて影響を与えるような経験が幼いころにあるということではないかと思えます。それは、自分の人生に出会う手掛かりのありかを教えている言葉と言えます。それぞれの中にそれを教え続ける三つ子の魂があつて、それは百まででなくならないと。

自分の人生に出会うつて何でしょう。そんなことする必要があるのでしょうか？なければそれでいいのですが、それまで持つていた知識や価値観では間に合わなくなった時、つまり苦(四苦八苦)がそれを導く時、必要になるのかもしれない。

業(カルマ)とは、しばらくたような暗いイメージがありますが、私は自分が何かと繋がっているということのようにも感じます。へその緒みたいに私にくっついていて、それをたどれば私を生み出してきたモノが見えてくる。自分が歴史的社会的な存在であることを発見する。自分個人から両親、親族、地域、民族、人類へと繋がっている道に立つ。本当のことを知ることが癒しなのだとはい。グライ・ラマの言葉です。何によって苦しい

のか、それを知るだけで苦悩は質を変える。その自覚から何かが開かれる。苦悩の克服ではなく自覚。克服やがんばりは私たちよく教えられて、モデルもいっぱい知っています。自覚についてはあまり知らないと思います。自覚しないように隠したり、やり過ぎしたり、ごまかしたり…。ただ、あると認めることのなんと遠いことか…。

でもそれぞれの中にある三つ子の魂は、百まで私たちにそれをさせようと、私たちにはたらしかける、如来するものと言えるのかもしれない。

今年八月六日に、短時間でしたが広島平和記念資料館へ行き、ある気付きをもらいました。爆風で割れたガラスが無数に身体に刺さり、そのうちの除けなかったガラス片が、二十九年後に皮膚を破って自然に出てきたというガラス片の展示がありました。傷を受けた時は、その時を生きのびるために、ガラス片をまきこんでいったん治癒した身体が、長年の時をへて深部に収めていた異物を排出する。すごいことだと思えました。その隣には二〇年後手術によって取り出されたガラス片もありました。いのちの受けた想像できない悲痛、苦痛、それを超えて生きようとすることはたらき、それを助ける力…。それが実現したということの有り難さ。

そして実はそういうことは、精神的にも起こっているのではないかと思つたのです。人は辛い経験は一人では味わえなくて、感情を

フリーズさせて心の奥底へ沈めています。でもそれは、溶けてなくなるわけではなく、あのガラス片と同じように、身の内にチクチクと存在し続けている。表面は何ともないかのようにふるまいながら、深部の痛みに囚われ続ける。そしてやがては浮上する。浮上する時を待っている。

桐山岳大さんはそれに取り組むためには、モデルと方法と仲間がいると言われました。それを聞いてすぐ、三宝(さんぼう)が思い当たりました。仏、法、僧の三宝。仏はお釈迦さま、法はその教え、僧はそれとともに学ぶ人のつながり。仏教徒が大切にする三つの宝です。浄土真宗で言うならば、念仏者と聞法と同朋。学び続け、変化し続けるプロセスワーカー桐山さんのお話には、浄土真宗の言葉と呼応するところがたくさんあります。桐山さんとの出会いは私にとって浄土真宗を立体的に理解する大きな助けになりました。仏教のリアルな発見でもありました。逆に桐山さんは易行としてのプロセスワークを自分の課題にして下さっています。

ここ数年、仏教とプロセスワークを学ぶ機会をいただいて「卯毛羊毛のさき」として私の感じたことを書いて来ました。

これからは桐山岳大さんのお話「人を自由にする道具」を連載します。

